



148号
2009/11/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町 1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
http://wanli.web.infoseek.co.jp/
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



〈胡同内での記念写真〉(写真説明7p)

於:中国北京東城区 2008年11月06日
撮影:木村武司

‘わんりい’148号の主な目次

北京雑感(39)「変わってほしい北京Ⅰ」	2
私の調べた四字熟語37「屋烏之愛」	3
媛媛讲故事⑩「呉剛、桂の樹を伐る」	4
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	5
土の香りのモダンアート・農民画(4)	6
‘わんりい’活動報告・「農民画・お話とスライドの会」	6
表紙写真について	7
「杭州見聞録」	8
11月の歌「几多愁」の歌詞	9
スリランカ紹介(33)「ジャフナ珍道中Ⅷ」	10
中国を読む(62)「日本ブランドで行こう」	11
アフリカとの出会い(37)「ケニア式結婚披露宴」	12
私の四川省一人旅(29) 垂丁 ⑩	14
‘わんりい’掲示板	16

♪「中国語で歌おう!会」11月の歌 ♪

哀切の古詩・^{jǐ duō chóu} 几多愁 (虞美人)

五代十国時代(907~960)の一国である南唐の王・李煜作の古詩「虞美人」。国は滅亡し、囚われの身となった我が身を嘆き、過ぎ去った日々への思いの深さを長江の流れに譬えて切々と歌う。(歌詞9p)

於:まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏 109 ファッションビル 7F

11月20日(金) 19:00 ~ 20:30

●指導: ^{zhào fèng yīng} 趙鳳英 (中国人歌手)

録音機をお持ちの方はご持参下さい。

●参加費: 1500円 (体験無料)

●「中国で歌おう!会」

12月の講座日: 12月18日(金)

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局(☎042-734-5100)へお問合せ下さい。

今まで私は北京の変貌の大きさに戸惑い、古い北京の雰囲気が増えなくなるのを嘆いてきましたが、今回はちょっと視点を変えて、変わって欲しい北京を書いてみます。古い北京の雰囲気が好きと言いながら、今の北京の便利さをもっと楽しもうと言うのですから、聊か後ろめたい気持ちもありますが、敢えて続けます。

変わって欲しいものの第一はバス停の名称です。ご存知のように北京市には夥しいバス路線が縦横に走っていて、慣れるとかなり便利なのですが、一つ困ったことがあります。

それは路線によって同じ名前のバス停でも停まる所が違ふことがあるのです。バス路線が多いので、場所によってはバス停がずらっと並んでいて2、3百メートルに亘ることがありますが、同じ道路上にある限りあまり不便は感じません。ところが時々同じ名称の停留所が路線によって、角を曲がったところだったり、甚だしい時には同じブロックの裏側に停まったりします。

以前、友人のお宅にお邪魔する時、「〇〇路線に乗って△△停留所で降りて……」と詳しく教えて頂きました。バス停で待っていても指定の〇〇路線のバスはなかなか来ません。運行表を見ると指示された停留所名は他路線◇◇にも□□にもあるので、指示路線とは違いましたが、次に来た◇◇路線に乗って指示された停留所名と同名の停留所で降りました。ところが、その後教えて頂いた様に歩けません。道が無いのです。

まだ携帯電話が今ほど普及していない時で、公衆電話を探しても見つからず、歩いている人にたどたどしい中国語で尋ねると、辛抱強く聴いてくれて、私が〇〇路線に乗らなければいけなかったことが分かったと、その停留所はあちらだと教えてくれました。その停留所は何とそこから角を2回曲がった、ブロックの裏側で、その停留所に辿り着いたら、後は説明の通り簡単に友人宅に行き着きました。停留所名より、乗車する路線の方が大切だったので。

そうかと思うと、同じ場所にある停留所なのに路線によって違う名前になっていることもあります。その路線が家の近くを走っているのは確認出来ているのに、離れた場所から家に戻ろうとその路線に乗ろうとすると、家の近くのバス停の名前がありません。「儘よ」と乗って行くと、確かに家の近くで停まりましたが、そこは全く違う名前の停留所でした。

こんなことは、少し北京の街に慣れてくると、「これが私の行きたい停留所だろう」と予想して乗ることが出来るようになりましたけれど、一度実地の経験をすれば心配で、不便なことには違いありません。是非

統一して欲しいと思います。

もう一つバスに関して苦言を呈すと、運行の変更等に関して、利用者への通知が不十分です。

前門地域の改修が始まった頃、バス停は今までと同じ場所にあるのですが、路線によって発着場所が大きく移動したことがありました。後から考えれば全面的改修工事を始めるための準備だったのでしょうが、いつもの場所に行ってもバス停がありません。ウロウロしながら探し回りましたが、私が乗る予定のバス停は見つかりません。近くで交通整理をしている人に訊きましたが、分からないと言います。仕方なく巡査に訊きますと、今までとは全く違う場所に新しくバス停が出来ていて、一部路線はここを発着点としていたのです。

それを知った時は、本当にヤレヤレという気持ちでした。あちこち歩き回っている間、この変更に関する通知はどこにもありませんでした。大幅に変わったようでしたから、一覧表にでもして掲示すべきではないかと思いました。

またある時、西単の本屋さんに行こうと思い、地下鉄より歩く距離が少ないので、地下鉄2号線の上の道を走っているバスに乗ることにしました。2週間前にも乗ったので自信を持って待っていましたがなかなか来ません。やっと来たと思ったのにバスは通過して行きました。次も、その次もバスは通過して行きました。

よく見ると、今までは直進して来たのに、今日は皆左から右折して来ています。しかもバスの前面に「急行」と書いてありました。つまりここには停車しません。2週間間に路線の運行方法が変更されて停車しなくなっていたのです。仕方がないので地下鉄に乗って西単に行きました。この時も、この変更の通知は何処にもありませんでした。日本ならバス停に張り紙でもして知らせることでしょう。

このような変更は私が北京人でないので見逃したのかと思いましたが、間もなく、そうではないことがハッキリしました。私がいつも利用するバス路線にもこの急行化がありました。

ある時、北京人の友人が親戚のご老人をバス停まで送って行きましたが、車のUターンで隣のバス停で降りました。ところがこのバス停にはその方が乗るバスは停まらなくなっており、この変更を北京人の友人も知らなかったのです。やはり利用者への周知が徹底していないようです。

最近、北京でも地下鉄駅が増えてきましたが、まだまだバスを利用しなければなりません。もう少し利用者の便宜を図ってくれてもいいのではないかと考えます。

皆さんは、「惚れた目でみりゃ痘痕も笑窪」という諺をよく聞くとします。実は同じような意味を持った四字熟語に“屋烏之愛(おくうのあい)”があります。あまり耳慣れない熟語ですが、辞書を調べてみますと、

▲三省堂・大字林では、

「屋烏の愛：人を愛すると、その家の上にとまっている鳥までもいとおしくなるということ。愛情が深いことのたとえ」とあり、

▲小学館・中日辞典には次の成語が載っていました。

「愛屋及鳥：人を愛すればその人の家の屋根にとまるカラスまでもかわいい。人を愛すればその人に関係のあるすべてを愛するようになる。愛情の深いたとえ。屋烏の愛」

と説明されています。日本語と中国語では、文字の順が入れ替わっていますが、意味は同じです。

この成語の出典は〈尚書大伝・大戦〉です。^(注1)

南朝(殷)の末期の紂王^(注2)は贅沢のかぎりを尽くし、残虐非道であったので、西方の諸侯の首領であった姫昌は南朝の紂王を打ち倒して暴政を止めさせようと決意し、積極的に軍を拡張して戦いに備えました。ところが大変残念なことに姫昌は出兵する前に亡くなってしまいました。姫昌の没後、子の姫発が後を継ぎ周の武王に即位しました。

周の武王は諸侯と連携し、参謀の姜尚の助けを借り、自分の弟(後の周公 魯の開祖)を補佐として紂王を攻撃するために出兵をしました。双方が牧野(河南省汲県付近)で交戦し^(注3)、その結果南朝が大敗して、紂王は焼身自殺をしてしまいました。

武王は、紂王の死後も依然として天下が安定していないと感じ、ある日、姜尚に引見して意見を訊いてみました。

「殷の都に入ったら、南朝の軍人たちの処置をどのようにすべきであろうか。」

姜尚は答えて言いました。

「私はこういうことを聞いたことがあります。ある人を好きになったら、その人の家の屋根の上にとまっている鳥までもいとおしくなり、反対にある人を嫌いになると、その人の家の垣根までも嫌いになってしまうものだそうです。つまり私の申し上げたいことは、我々に

とって敵の兵は大いに嫌な相手であり、このまま生かしておけばますます憎しみも増し、天下は安定することはないと思います。したがってそのような兵たちはこの際皆殺しにしてしまったほうが良いのではということです。大王はどうお考えになられますか？」

武王はこの考えには同意しませんでした。

召公(召公奭のこと、周王朝建国に尽力した)は次のように言いました。

「私が以前に聞いたのは、有罪の者は全て抹殺し、無罪の者は生かしておくというやりかたです。それ故私は敵の兵の中で我々の兵を直接殺害した者を有罪としてそれらの者は全員殺してしまうべきと考えます。大王はどう思われますか？」

武王はこの意見にも同意しませんでした。

次に周公が言いました。「私は君主たる者は、好きだからその人を大切にする、嫌いだから殺してしまう、また罪を犯したから抹殺してしまう、罪が無いから生かしておくというようなことでなく、天下の全ての人に対して思いやりのある政治を行うことが一番大切だと考えます」

武王はこの話を聞いて気持ちがぱっと明るくなり、直ちに周公の説の通りに実行したと

ころ間もなく天下は大変安定したということです。

後世に武王は夏の禹・殷の湯王・父の文王と並び聖王として崇められています。

■注記(引用:フリー百科事典『ウィキペディア』より)

1) 尚書大伝：伏生が編纂した中国の歴史書。

2) 紂王：生没年は不詳。夏代末王であった桀とともに桀紂として悪徳の王の典例とされるが、真偽のほどは不明。人民には重税をかけ、天下の宝物を私物化し、酒と婦人に溺れた。中でも愛妾・妲己を伴って日夜宴会を開き、そのとき肉を天井から吊るして林に見立て、酒を溜めて池に見立てて、欲しいままにこれらを飲み食った。後に度を過ぎた享楽を称して“酒池肉林”と呼ぶようになった謂われである。

3) 牧野の戦い：牧野の戦い(ぼくやのたたかい)は、古代中国の紀元前11世紀に、殷の紂王と周の武王を中心とした勢力が争った戦い。周軍が勝利し殷王朝は倒れ、周王朝が天下を治めることになった。

屋烏之愛(おくうのあい)

三澤 統

私が調べた四字熟語 37

今年の十月の三日は、中国の中秋節でしたが、この日は一日中、生憎の曇り空で、残念ながら夜になっても中秋の名月を見ることができませんでした。しかし、翌日の夜は、雲ひとつない澄んだ空に、煌々と耀く美しい十六夜の月が懸かりました。その月を見ている内に、月に纏わる話をまたしたくなってきました。

去年は月に纏わる物語として、月に住むという常娥の話を書きましたが、実は月には常娥の他にも、一人の男性が住んでいると言われています。その男性は「呉剛」といい、日本へも「桂男」^(注1) という民話の伝説になって伝わっているようです。

昔、「呉剛」という男がいました。たいへんな怠け者で、働くことが大嫌いで、奇想天外な夢に耽ってばかりいましたが、或る時、仙術を習って仙人になろうと心を決めました。或る日、呉剛は荷物を纏めると、「俺は仙人になるための良い先生を見つけに旅に出るぞ」と妻に告げて、家を出て行きました。

旅に出た呉剛は著名な先生を訪ねて方々を巡り歩き、仙術をなんとか身に着けようとしてきました。しかし、修行のための苦勞に耐えられず、何をしても三日坊主で長く続かず、何年経っても結局は仙人になる術を何もものにできませんでした。その内、呉剛は家のことが懐かしくてたまらず帰路に着きました。

一方、家に残された呉剛の妻は、ずっと呉剛を待っていましたが、待っても待っても呉剛の姿どころか、呉剛の消息さえも一切聞こえなくなっていました。呉剛の妻はもう夫は帰ってこないかと絶望し、伯陵という男と再婚して三人の男の子を生みました。

呉剛が故郷に戻り、自分の家の門をくぐって見ると、庭で三人の子供が楽しく遊んでおり、一人の男が薪を割っていました。びっくりして、家を間違ったと思いました。自分の妻が軒の下で布を織っている姿が見えます。「妻はもう再婚してしまったのだ」と悟ると呉剛の心の中に激しい怒りが湧き上がりました。呉剛は一本の木の棒を取り上げると、大声で怒鳴りながら男の頭にその木を振り下ろしました。男はそれを避けようとあち



こち逃げ惑いましたが、結局、打ち倒されて、頭から血を流して再び起き上がることはありませんでした。子供たちはその光景にびっくり、わあわあと泣き出し、妻も突然のことにしばし言葉を失い、しばらくすると悲痛な声で泣きはじめました。

その騒ぎは隣人達にも届いて、皆、何事が起こっ

たかとビックリして集まって来、呉剛が帰って来たことを知りました。隣人達の中には妻が再婚したことは当然の成り行きだと認める人もいれば、妻として呉剛の帰りを待つべきだったと批判する人もいて激しい議論になり大変な騒ぎになりました。

この騒ぎが程なく天上界に伝わり、今は天界の神になった炎帝の耳にも入りました。実は、伯陵は炎帝の子孫の一人でもあったので、炎帝の機嫌が悪くなりました。

炎帝としてみれば、呉剛は、自分の子孫を殺すという重罪を犯したのですから、厳しい処罰を与えて懲らしめなければいけないのです。しかし、伯陵も他人の妻を娶ったという誤りを犯したことを考えて、呉剛の罪を軽くしようと炎帝は考えました。呉剛の、仙人になりたいという夢を知っていた炎帝は、呉剛の仙人になりたいという願いを实

現させると共に、呉剛を寒くて、寂しい月に追放しました。また同時に、桂の木を切らせるという罰も与え、その木が倒れるまで家へ戻ってはいけないと命じました。

呉剛は月に昇りました。月は本当に寒くじっとしてられないほどです。目の前には、高さが五百丈(注2)にもなる巨大な桂の木があり、木の上には小さな香りの良い花が満開に咲いていました。しかし呉剛は寒くてたまりません。怠け者の呉剛ですが、急いで斧を手にとると仕事を始めました。しかし、どうしたことでしょう。この怪しい木は、伐っても伐っても倒れないばかりか、傷はすぐ塞がって、斧を加えた跡は全く残りませんでした。気の短い呉剛は腹を立て斧を捨てて、寝てしまいました。何日間も寝続けて、そして呉剛は考えました。

「伐り倒せないことを悩むよりも、こつこつと伐り続けられれば、必ず倒れるだろう。一日も早くこの寂しく寒い月から家へ帰ろうと思うなら、この桂の巨木を切るしかない」

呉剛は覚悟をすると今度は真面目に仕事を始めました。

人間界にいる妻ですが、心の中では呉剛にすまない気持ちでいっぱいでした。そして、三人の息子達に、「大きくなったら、月に行って呉剛を手伝ってあげてください」と言い付けました。

言い伝えでは、その後、一番上の息子はカエルになり、二番目の息子はうさぎになり、三番目の息子は楽師となって、皆、月に上りました。

今、満月に踊りをしている常蛾、薬を作っているカエル、石臼で餅を搗く兎などの影が見え、楽器を弾く音が聞こえるようになった由来だそうです。

■注記

- 1) 桂男(かつらおとこ): 月に住むという妖怪の一種で、満月でないときに、月を長く見ると、桂男に招かれて命を落とすこともあるという説もある。日本では、妖怪とはいえ、雅やかな名前と絶世の美男子の姿をしているという。
- 2) 丈: 中国古代の1丈≒2.3m、現在の中国では3.33mである。

松本杏花さんの俳句「余情残心」より

長老の竹の楽器や秋の声

chánglǎo duō cái néng
長老多才能

xīngzhìbóbó chuī zhú shēng
兴致勃勃吹竹笙

niǎoniǎo qiū zhī shēng
袅袅秋之声

赏析: 秋声。当然指秋季特有的声响、但在俳句中、则有更广泛的象征意义。如雨打芭蕉声、蟋蟀残鸣声、都给人以枯寂感。另外、夜深人静时从遥远地方传来的音响、夜归于“秋之声”。

此句中的秋之声一语双关、达到了天人合一的境界、真是妙不可信!

魯かな別れに固き握手なる

lǎo chá xīn yá chōu
老茬新芽抽

liànliànbùshě líbié chóu
恋恋不舍离别愁

jǐn wò lǎoxiāng shǒu
紧握老乡手

收割后田地的老茬中又发出新芽、这是秋天的季语。

赏析: 此句愚意深刻。作者几度访华、于中国人民结下了深厚情谊。结束苗寨访问时、双方紧紧握手、依依不舍。不是吗? 在收割过的田地里、残留的老茬又冒出了新芽、象征着离别后的情谊会有新的拓展! 这充分表达了中日两国人民的心愿。



今月号より農民画の解説をシリーズでお届けします。
今年の10月3日は皆さんもご存じのとおり陰暦では8月15日の中秋節にあたりました。当日の夜はあいにくの空模様でしたが、十四夜、十六夜は美しい月を見ることができました。

私たち日本人の生活はすべて陽暦で動いています。もちろん中国だってオフィシャルには同様ですが、彼らの生活の中には今でもかなり色濃く陰暦のリズムが残っています。そしてとても大切にしています。〇〇節という日になると、家族や友達の間でお祝いのメールを送りあいます。

ぱっと見、垢ぬけない上海人のおじさんから、えもいえぬ叙情的な詩が送られてきたり。そして何度も読み返すとちゃんと韻をふんだ文章になっていたりします。

なんて素敵なプレゼントでしょうね。
この絵は秋に巡ってくるもう一つの大切な日、9月9日の重陽節を祝っている様子を描いています。
私たちにはあまり馴染みのない重陽という言葉は、中

国の人たちが奇数を好んでいる（偶数は忌み嫌われているそうです）というところから来ています。陽の数つまり奇数の最大数である「9」が重なる尊い日ということでお祝いする風習が古くからありました。

この季節に咲き揃う菊の花を飾ったり、お酒に浮かべて飲んだりして楽しめます。高いところに登ったり、長寿のお祝いをしたりすることもあるそうです。

絵をよく見ると、四角く区切ったお餅に小旗をたてている人がいますが、これも重陽節にはよく見られる習わしだそうです。船の乗客の数は数えてみると奇数ですね。どうぞ、と振る舞われているお茶も。。。よかった、奇数ですね。

中央の船のお嬢さんたちの髪の花は、私にはどうしても菊には見えません。でもきっと作者の陳さんにたずねたらこう言うと思いますよ。「菊は描くの難しいですから」。“農民画は描く人も見るひとも力を抜いて”が、いいようです。



絵：陳芙蓉「九月重陽節」（上海・金山農民画院）

10月12日(祭)、町田市民フォーラム3F視聴覚室で、わんりいが中国の農民画のお話を聞く会を催しました。当日は、「農民画」と聞いてどんなものか興味を持った方、以前ご覧になってもっと知りたいと思われた方等、20人以上が集まりました。

講師の平野理恵さんは、ご家族で3年程上海に滞在している間に、上海近郊・金山の農民画に惹きつけられて、帰国してから中国の農民画を日本の人々に紹介するために、日本 / 農民画協会を立ち上げ活動をしています。平野さんと農民画との出会い、紹介活動に至る思い、農民画の歴史等を伺いながら、プロジェクトに映し出された絵の解説を聞きました。室内には、額に入れた農民画の実物も展示され、皆、その鮮やかな色彩に強い印象を受けたようでした。

皆さんは中国の農民画についてご存知ですか？中国の絵画と言うと水墨画を思い浮かべますが、農民画は全く違った雰囲気です。どちらかと言うと剪紙(切り絵)の流れを汲む平面的な絵です。ポスターカラーを使って色鮮やかにくっきりと塗り分けて独特の世界を作り出しています。平野さんのお話によると、元々は農閑期に農民が手慰みとして、目の前の情景や伝統行事を粗末な紙に泥絵の具などで描いていたのが、1950年代の大躍進時代に政策のプロパガンダとして利用されるようになり、各地に指導員が派遣されて、地方色豊かな農民画が生まれたそ

うです。

改革解放の時代になると、絵の得意な人々が農民画家として自分の絵を売るようになり、今、私達は1枚80元程で買うことが出来ます。この金額は、物価の安い農村部での収入としてはかなりなものだと思います。そのせいかどうか、昔の泥臭くて力強い農民画と比べるとかなりスッキリしています。それはそれとして、絵の題材から農村の昔の生活や伝統行事を知ることが出来て大変興味深いものです。

お話が一段落したところで中国茶と手作り月餅が振舞われ、後半はお茶を飲みながらの質疑応答と話し合いになりました。参加者の皆さんは、どの絵も明るく楽しそうなのに感銘を受け、どんな所でどんな人達がこのような絵を描くのかに興味をもったようです。

熱心な方は、今回紹介された金山へ行ってみたいと思われたようですが、平野さんのお話では、個人的にこの地域を訪問するのはかなり大変なようです。希望者が集まれば、先方と連絡を取って団体旅行が組めるのではないかと話が弾みました。これは、これからの研究課題になるでしょう。

この日のお話の会は、またこのような会を開いてくださいと言う参加者のお言葉をいただきながら、和気藹々のうちに幕を閉じることが出来ました。

(報告：有為楠)

【表紙写真説明】

私がテーマとして写真を撮り続けている、北京の路地裏・胡同内での記念写真の1枚である。

風景の中に人物がいる写真の提供をとの'わんりい'からの希望で、この写真を迷わず選んだ。中国の文化・習慣のほんの一部でも私の写真や文章から知ってもらいたいと思ったからである。

この写真の人物は私が胡同内の写真を撮影するために、いつも一緒に同行してくれる友人達である。全然知らない人の家の玄関前で彼らの記念写真である。中国社会は、良いか悪いかは別にして「コネ」の社会である。私はずっと胡同の撮影を続けているのだが、毎回、中国の友人達が快くなにかれと協力してくれるのである。

私達外国人が北京・胡同の撮影をしたいと希望したとしても、道路から門をくぐって勝手気ままに人の家に入り込んで撮影するなどは当然許されることではない。しかし、中国の友人達が、その住人に撮影許可をもらってくれて、私は堂々と思う存分に撮影が出来るのである。

写真の中央と左側の二人は夫婦で、昔からの私の友人である。右側の人は、その夫婦の娘さんの嫁ぎ先のお父さんで、撮影した胡同のすぐ近くに住む方である。

北京もコソ泥等が多い。地元北京の泥棒はお金を盗むが、地方からの泥棒は物を盗むという。それだけに住民はコソ泥に四六時中、注意を払っている。胡同内を入り口付近から私達が覗いていると、犬が吠えるわけでもないのに中から人が出て来て“何をしているのか？”と訊かれる。人の家の敷地内をキョロキョロ見ていれば、不審者と思うのは当然の事である。

そんな訳で先ずは右側の男性が、私はこの近くに住むもので、胡同の記録をしていると切り出す。夫婦も間を入れずに、いつ頃この家は建てられたのかと訊ねる。胡同の住民は、自分達と同じ



全体の写真：北京東城区 2008年11月06日

北京語での会話だし、年齢的にも身なりにしてもコソ泥とも思えないからか、すぐに自分の家の自慢話になり、やがては撮影許可が得られるという訳である。友人達の協力は、本当にありがたい。

北京の路地裏・胡同。大通りから裏通りに入ると庶民の生活感溢れる胡同の風景が変わる。大通りの喧騒が嘘のように静かである。道路の両側が白壁の狭い道の所々に胡同の門がある。その道路に面した門から中に入ると、北京の伝統的な家屋が視界に入る。

日本では正月が過ぎれば、正月用の飾り物は全て取り去ってしまう。しかし、中国では、正月の飾り物として胡同の入り口の両側に貼られた春聯が、風雨にさらされビリビリになったままで、それが却って、歴史ある建物のイメージに彩りを添える。

門から奥まった所に家屋があるので、生活用品なども人目などは気にしないで放置されており、自然そのものである。私はこの様な一般庶民の生活のある風景が大好きなのである。

(コメント：木村武司)

私は2007年7月から2009年6月末までの大連在住の2年間、東北・華北・華中そして新疆ウイグル自治区の各都市を旅した。旅行先の見聞録を、以前勤めていた会社の新潟支店のOB会報に寄稿を始めた。本稿は、杭州市に関する見聞録を一部手直しして書いたものである。

杭州といえば、中国に興味のある人なら誰でもご存知の「上有天堂、下有蘇杭」（上に天国、下に蘇州と杭州（蘇杭）がある）で有名だ。その中核をなすのが西湖であるが、西湖について赴くま前に書いて見よう。

私の生まれたところは広島市だが、この地を江戸時代最後に統治したのは「浅野家」である。広島駅からほど近いところに「縮景園」というきれいな庭園があるが、これを浅野の何代目かのお殿様が作庭した。この庭園は中国の西湖を模して作ったと説明書にあるが、若い頃から西湖というのはどんな湖だろうと頭の中で勝手に想像していた。

従って初めて中国特有の霧がスモッグが分からない薄ぼんやりした中に見える西湖を見た時は幻想的でとても感激したのを覚えている。夕暮れにさしかかり白堤をゆっくりと歩く時、近くの山々がライトアップされ、夢の中にいるような気がした。2度目に訪れた時、空はめずらしく晴れ渡り、全く別の顔の西湖も見ることができた。しかし遠くに市街地のビル群が景色の中に入り込んでいるのには少々がっかりした。

西湖といえば「西湖十景」という絶景スポットが有名である。中でも「三潭印月」と「断桥残雪」が印象に強く残った。西湖には人工の島が幾つもあるが、遊覧船に乗ると必ず立ち寄る島の南側の湖面に3つの石塔が立っている。

ガイドによると中秋の名月の時この塔に火が灯されるそう。そして月夜に船から湖面に映る月を見ると月が3つに分かれて見えることから「三潭印月」という名がついたそうである。確かに素晴らしい情景である。詩の1つでも作ろうという気になるというものだ。

もう1つ白居易が作らせたという前述の白堤（西湖の北に架かる全長約1kmの堤）の北端にかかる橋の雪景色を詠った「断桥残雪」であるが、なぜこのような名前が付いたのだろうと考えていた。

話が横道にそれるが、断桥といえば大連から東北東の方向に約300km離れた所に丹東という都市がある。この街には有名な鴨緑江（ヤールージャン）という水量豊かな国際河川が流れている。ここに日本軍が完成させた鉄道橋があったが、朝鮮戦争でアメリカ軍が空爆し、北朝鮮側が橋桁だけ残り、なくなったままで置かれており、今は「断桥」として観光名所になっている。

話を戻すと、この白堤にはどこにも壊れた橋はないのになぜ「断桥残雪」というのかと訊くと、積雪のあと雪が橋のまん中から溶け始め、まるで橋が中央で折れているように見えることから付いた名前とのこと。いったい誰がこんなに上手にネーミングしたのだろう。所でここは白蛇伝で有名な場所とのことだ。ちょうど「わりい」で何嬢嬢さんが詳しく述べられていたので、私はとても興味をもって読ませてもらった。

書き落したが、三潭印月の景色は1元札の裏のデザインということをご存知であろうか。私は50元札や100元札よりこの1元札がとても好きなのである。中国のお札は



蘇軾（蘇東坡）が築いた〈蘇堤〉の散策路



約3kmある蘇堤の南側の入り口にて



1元紙幣 裏面



西湖の北にある岳飛廟の入り口付近の賑わい

あまりきれいでなく、特に1元札などヨレヨレのものが多
いのでじっくり見ることがないためか、私のいた大連の会
社の従業員に聞いてみたが、1元札の裏のデザインを知
っている人は、ほんのわずかであった。

さて湖畔のある場所に岳飛廟がある。岳飛は北宋の武
人で国のために命を落した。彼は「金」という国に奪われ
た地方を奪回しようとしたが、投降した秦檜の陰謀で投獄
され毒殺されたという。のちに冤罪がはれ国民的英雄と
なり、この地に祀られた。この廟の一角に彼をおとし入れ
た秦檜の鉄製の像が置いてある。私がある場所を通りが
かった時、中国人の観光客が何人もその鉄像を蹴とばし
たり、頭を棒でなぐったりしているのを見た。何とも言え
ない気持となったが、「恩讐の彼方に」と水に流してしま
い、罪人でも死ねば仏とする日本人の国民性からすれば

違和感を覚える人も多いのではなかろうか。

西湖といえば西施である。春秋時代の美女で、呉王の夫
差も政治を放り出すくらいであるからよほどの美人であ
ったのだろう。当時の美人はどういう顔なのか実物を見て
みたいものだ。とにかく芭蕉も象潟を旅する時、西施を詠
むくらいであるのだから。

西湖に別れを告げ我々は、銭塘江に向かった。中国の大
河は本当に悠々と流れている。水源地から海に至るまでの
距離が長いのと、日本のような高低差が少ないことからあ
たりまえであるが、長いスパンで物を見ると一般的に言
われる中国人の気質と合っているような気がする。

この大河も、年に一度の海水の逆流現象でその昔は何
度も氾濫したという。そのため呉か越かわすれたが王がこ
この大河を鎮めるのに川のそばの小高い丘に建てたのが「六
和塔」だ。ガイドによると外見では13階の八角形に見え
るが、本当は7層・八角形だそうだ。どちらでもいいが約
60mあるこの塔の迫力はすごいのだが一言。970年が創
建で現存する塔は1163年に建設されたと言うが、その
建築技術はすばらしい。私はここに興福寺の五重の塔をも
って来たらどんなであろうと想像したが、日本一の五重の
塔でもここに置くと銭塘江に負けてしまうと思った。

マルコ・ポーロも杭州を訪ねておりそのすばらしさから
「地上の楽園」と称賛しているが、東方見聞録にどのよう
に書いているのだろうか。緑も多く、散歩したくなるよう
な道も無数にあり、五千年の歴史が色濃く刻まれているこ
の杭州には、今後も何度も来てみたい。

「中国語で歌おう！会」11月の歌

jǐ duō chóu
几多愁 (虞美人)

詞：李煜*

chūnhuā qiū yuè héshí le
春花秋月何時了

wǎngshì zhī duōshǎo
往事知多少

xiǎo lóu zuóyè yòu dōngfēng
小楼昨夜又东风

gùguó bùkānhuǐshǒu yuè míng zhōng
故国不堪回首月明中

diāo lán yù qì yǐng yóu zài
雕栏玉砌应犹在

zhǐshì zhū yán gǎi
只是朱颜改

wèn jūn néng yǒu jǐ duō chóu
问君能有几多愁

qià sì yī jiāng chūnshuǐ xiàng dōng liú
恰似一江春水向东流

【意訳】

春の花、秋の月、昔も今も季節をいろどる / 花や月
を見るにつけ、過ぎし日の思い出は数限りない / 高殿
には、昨夜も春風が吹いた / さえわたる月明りの下に、
はるかなる故郷への想いは耐え難い。

豪華な宮殿は今もそのままに在るだろうに / 我が身
の、若き日の容姿はどこへ行ってしまったのか / わが
胸に満ちる悲しみはいったいどれほどか / 長江を流れ
る春の水が、東を指して流れて行くように尽きること
はない。

*李煜:

中国の唐の滅亡から宋の成立までの間に興亡した五代十
国(907年～960年)の、「南唐」の三代目にして最後の君主。
宋の侵攻を受け、捕えられて虜囚の生活を送ったが、2年後、
42歳の誕生日に毒を盛られて殺された。若くして詩文、書画、
音楽に通じ、わけても詞を得意とした。詞の新生面を切り開
いた功績はきわめて大きいと言われている。曲名の〈几多
愁〉は李煜の詞(虞美人)の中の一句を取っている。

前回はチェックポイントの責任者と交渉をした結果、妊婦と子供がいる家族はゲートを通り過ぎて良い事になったところで終わりました。ただし、この先にある赤十字と政府軍チェックポイント双方の責任者の同意を得ることが出来たらという条件付です。

LTTEの責任者と共に事務所に入ると、さっそく赤十字と政府軍の責任者と電話交渉を始めました。先ず赤十字は全く問題なく同意してくれました。次に政府軍ですが責任者は既に事務所から帰ってしまい、事務所に残っているスタッフには時間外の通行許可を出せる権限が無いようで、交渉は不成立に終わってしまいました。責任者を捜してもらえないか尋ねましたが、明確な返答はありませんでした。LTTEの責任者はいつも同じ事の繰り返しだと言って直ぐに交渉を諦めてしまいました。

これでLTTEのキャンプで夜を明かす事が確定です。ゲートの前に最後まで残っていた人達も渋々キャンプへ移動を始めました。

LTTE担当者の誘導に従ってゲートから車で数分の距離にあるキャンプに着いてみると、照明は無く真っ暗闇です。広場の周りに簡易宿舎と貯水塔があるのが、弱い月明かりの中にぼんやりと浮かび上がって見えました。キャンプはジャングルに囲まれているようですが暗くてハッキリとは判りません。簡易宿舎に案内されるとLTTE担当者の持つ懐中電灯の小さな明りで、板張りの二段ベッドがあるのが見えました。窓には網戸が無いにも拘わらず蚊帳すらないようで、デング熱やその他の感染が心配になりました。次に貯水塔に案内されました。高さは2～3mのコンクリート製でシャワー代わりにのホースが何本か貯水槽から出ています。トイレは簡易宿舎の裏にあるそうですが、見に行く気にもなりません。

LTTE担当者が施設の説明を終えて事務所に戻ると、元の真っ暗闇に戻りました。遅刻組の男達は広場の中央に車を集めてヘッドライトの明りの中で何やら相談を始めています。ジャングルの中で危険だから自警団を作ろうという相談のようです。友人二人も参加しています。

アジア各国とも同じ様なものかもしれませんが、スリランカの人達は何かあると集まってワイワイガヤガヤやるのが大好きです。そして他人の世話を焼く事も、時には親切すぎてお節介だと感じる程大好きです。以前、僕がドライブ中に道に迷って地図を見ていた時にも、周辺に居た人達が自然に集まって来て僕が何処に行きたいのか話す前から、勝手に僕が何処に行きたいのか推測して道案内

を始めた人がいました。

僕が地図を示して、今いる場所が何処なのかと手振り身振りで聞いただけでも、回りにいた人達がてんでんバラバラに地図上の適当な場所を指差す始末です。いよいよ僕が行きたい場所の地名を口にするると皆が大興奮です。道に迷っている当の本人である僕をそっちのけにし、集まって来た人達だけで東西南北あらゆる方向を指差して、あっちだこっちだと叫んでいます。

僕の理解する事ができないシンハラ語で道案内を買ってしようと、沢山の人が各々の意見を伝えようと僕の処にやって来ますが、何を言われているのか全くチンプンカンプンです。この国の人達にとってワイワイガヤガヤは格好の暇つぶしなのでしょう。この時には英語の話せる三輪車タクシーの運転手さんがいたので、道順を聞いてなんとか目的地に着く事が出来たのですが、この国の人達はワイワイガヤガヤとやっているうちに、時間の経過と共に本来の目的を忘れて議論する事自体を楽しんでしまう傾向にあるようです。

広場の中央でワイワイガヤガヤやっている人達の議論も盛り上がっているようで、何人かの人達が同時に叫んでいます。傍にいと鳥小屋に頭を突っ込んだような騒音です。少し離れた場所では1対1でお互いを指差しあいながら怒鳴りあっている人もいます。恐らく議論が終わるまでにはかなりの時間がかかる事でしょう。もしかすると議論が終わらないうちに明朝になって、ゲートが開く時間が来るのではないかと感じてしまいます。僕目からみると、広場の中央に集まっている人達は何か困っている事を議論していると言うよりも、これから何をして遊ぼうかと目を輝かせて嬉しそうに相談している歳を食った子供達のように見えました。

いつまでも議論を見ていても仕方が無いので、キャンプの中を探検してみる事にしました。先程案内された簡易宿舎に再び戻ってみると、二段ベッドの足元には蚊取り線香を置くための缶カラが置いてあるのに気がつきました。缶カラの中には燃え滓が残っていましたが、周囲には蚊取り線香自体は見あたりません。前にこの簡易宿舎で夜を明かした人の中に用意の良い人がいたのでしょう。僕達は、ご法度のアルコール類は隠し持って来ますが蚊取り線香までは思いつきませんでした。今回の遅刻組の中に用意の良い人がいる事を期待してしまいます。ベッドを触ってみると、木の床の上には藁でも入っているらしい薄くて硬いマットが敷かれています。藁の中にはダニでも棲んでいそうな気がします。このベッド

で寝るよりは車の中の方が寝心地が良さそうです。

次に貯水塔に行ってみると月明かり中でお母さん達が子供達にシャワーを浴びさせていました。スリランカの人達は本当に水浴が好きで、一日に何回も水浴をします。さすがにコロomboの中心部では見かけることは少ないですが、中心部から一歩足を踏み出せば貯水池や川はもとより側溝のような処でも水がある処では誰かしら水浴をしています。スリランカの人にとっては、寝るのはベッドでなくても寝れますが、水浴無しには寝つきが悪いでしょう。

このキャンプにももしも水浴の施設がなかったら不満が爆発していたかもしれません。LTTE側もそこいら辺のポイントは押さえているようで、簡易宿舎のベッドには感心できませんでしたが、水浴施設には感心しました。大人と違って子供達には恐怖心があまり無い様で、水のかけっこをして遊んでいます。お母さん達はここで一晩過ごすのだと覚悟を決めた様子で、既に浴衣に着替えていました。男達よりも腹が据わっているようです。

僕がいつまでも居るとシャワーを浴びるのに邪魔だろうから早々に退散して広場の周囲のジャングルに近づいてみました。鳥の甲高い鳴き声が無気味です。豚だか牛

だか判りませんが鳥の鳴き声とは違った鳴き声も聞こえます。泣き声の聞こえた方向を良く見ると家の明りらしい光が見えます。翌朝になって周囲が見えるようになると、ジャングルの向こう側には想像した通り住居があるのが見えました。夜なので判りませんでしたでしたがキャンプは町の側にあったようで、広場で議論をしている男達はジャングルの中のキャンプに連れてこられたと思って怖がっていましたが、実はそんなに怖がらなくてもよかったようです。

キャンプの探検を終えて広場に戻ると、男達のワイワイガヤガヤは続いています。既に時間は9時を過ぎていきます。僕はお腹が空いてきていたのですが、まさかLTTEのキャンプに1泊するなんて考えてもいなかったの、食べ物は今朝アヌラダプーラで買い込んだお菓子しかありません。ワイワイガヤガヤに付き合っても仕方が無いので、近くに家の光が見えた事は内緒にして車に戻ってお菓子をつまみながら待つ事にしました。

今回でジャフナ珍道中を終わらせるつもりで書き始めたのですが、終わらせる事が出来ませんでした。もう暫らくお付き合い下さい。(続く)

中国を読む(62)

「日本ブランド」で行こう アレックス・カー著(ウエイツ)



タイトルが『「日本ブランド」で行こう』だったので、日本を褒めてくれる本だと思ったら、ちょっと違った。

東洋文化研究家&作家であるアメリカ人の著者が日本の現状と、これからあるべき姿を語っている。アメリカで生まれ、日本で育ち、イギリスに留学して中国を学び、現在は日本とタイを行き来している著者から見れば、日本の抱える問題がはっきりと見える。

自然や景観を壊してダムや道路をじゃんじゃん造る「浪費」や、なにかと「オール日本」でやりたがる閉鎖的な性格や、「犠牲」を愛する国民性がゆえに国策などが仮に間違っても突き進んでしまうことなど、淡々と語られている。

例えばそれは、「不思議なぐらいこの国はお金をどぶに捨てている」、「日本という国はすばらしい機械

だけど、一つだけ部品が欠けている。つまりブレーキです」と、著者自身、日本で暮らして感じていたことそのまま、という感じ。その素朴な意見は、素朴がゆえに、斜めに受け取ることもできず、こちらにストンと届いてしまう。

でも、そういう「日本」の性格って、個人レベルでは、何も変えられないじゃない？ と、最近、何に関しても思ってしまう私だが、著者はシンプルに答えている。「社会全体を変えようと言われても、一人の力ではかなわないから、結局自分の周りを何とかしようということから始まる」と。たとえば、日本の価値観が当たり前にならないように、自分の子どもを留学させるとか、国内でもボランティアやNPOに送るとか、そういう個人レベルでできることを、「たくさんの人がやると、社会が変わる」。

肩に力の入らない著者は、「それぞれの役割や立場があるから、どこの国もたくさんの国のなかの『ワン・オブ・ゼム』になればいい」という。「ワン・オブ・ゼム」になるためには、「ゼム」を知って、自分たちの「ワン」を明確に知らなくてはいけないわけで…、個人レベルで、まだ見ぬ子どもを留学させる前に、結局、すべては「ゼム」を知ることから始まる。(真中智子)

ある日道を歩いていたら、知らない男性が「明日僕の友人の結婚式があるのですが、一緒に来ませんか？」と訊ねてきた。私は「誰の結婚式ですか？」と訊ねた。彼は、それには答えず「あなたの友人の～さんも来ますよ」と答えた。

「彼は誰なのだろうか？」「どうして～さんと私が友人であることを知っているのだろうか？」「そもそも誰の結婚式なのか？」

いろいろな疑問が頭をかすめて、「行きません。直接招待されていない結婚式は行けません」と答えた。ため息を小さくついた彼は「友人の友人だから、友人じゃないですか？明日3時にここで待ち合わせしましょう」といって、何の目印もない今立っている場所を指した。

行くつもりはなかったが、次の日の夕方4時頃、孤児院の子供たちと買い物に出た帰り道に同場所をたまたま通ることになった。スーツを着込んだ昨日の彼が立っていた。

「待ってたよ。遅れてるから早足でいこう」。

裏表のなさそうな彼の笑顔を見ていると、ケニアの普通の結婚式を見ても悪くないかなという気になってきた。

「着替えてくるからもう30分待ってくれる？」

と自然に答えていた。

「いいよ。会場はすぐそこだから、大丈夫間に合うよ」。

ワンピースを着て、すぐそこという彼の言葉を信じてヒールのある靴で出掛けた。

日本の結婚式を当たり前のようにイメージしていた私。教会か、会場を借りているのだろうと想像していた。

サバンナの草原を歩く、歩く、歩く。丘や坂を繰り返して1時間あまり。丘の上にコンクリートで出来た建物が一軒建っていた。近づいてくると、その家には屋根がなく、窓枠にはガラスがないことが分かった。まさに、建築中の家。そこに100名以上のあでやかなスーツやドレスを着た結婚式の招待客が集まっていた。私を含め、正式に招待を受けた客はどれくらいいるのかは定かでない。私のように友人の友人に誘われて来ている人は私以外にもいるのだろうか。

私の友人を探すが見つからない。ということは、私は、知らない人の結婚式に、招待もされていないのに突然参加の招かれざる客ということになる。一緒に来た彼は、自分の友人達に合流して話しこんでいる。家に入ると、屋根がないのでケニアの青い青空が広がっていた。窓がないので、サバンナの優しい風が駆け抜けていった。

無造作に並べられた長いすの端に腰をかけた。ヒールのある靴で1時間あまり山歩きをした足は、疲れきって



ケニアの青空



歩いても歩いてもサバンナ

いた。「ふう～」とため息をつく、「結婚式が長引いているね」と隣の人が声を掛けてきた。「今からここで、結婚式ではないのですか？」と驚きを隠しつつ訊いてみた。「違うよ。ここは披露宴だよ。だから誰でもお祝いしたい人は来ていいんだよ」。

話しているうちに、遠方から白い車がやって来て、みんなの視線が集まっている。話しかけてきた人が「ほら、教会で結婚式を終えた2人が来たよ」と、教えてくれた。白い車、色とりどりの紙テープ、風になびく風船。ウェディングドレスとタキシード。ケニアの青空。サバンナの風。映画のような美しいシーンだった。

やがて車は近づき、2人は祝福の歌と拍手で迎えられて入場。花をいっぱいに取りながら、2人は一番前に置かれた2つの席に着く。初めてみる新郎と新婦。とても新婚とは思えないほど、2人は馴染んでいた。新郎の挨拶で、いろんなことが明らかになってきた。

2人は、10年前に既に結婚していて、「今日はセレモニーとしての結婚式と披露宴で、結婚式は教会で、披

披露宴は新居として建築中のこの家で行うことにしました」というわけだ。子供もすでに2人いた。その後、披露宴の参加者にマイクが渡され、皆、思い思いにお祝いの言葉を言っていく。100人以上もいるこの会場。一体いつ終わるのやら…と思いつつ終わるのやら…と思いつつ終わるのやら…と聞きながらそれぞれのスピーチを聞く。型通りの挨拶はなく、みんな笑いに溢れたスピーチをしていた。大爆笑が何度も起こっていた。

そしてなんと私にもマイクが回ってきた。ここにいる全員が初対面の私はとっさに何を言おうか迷ったが、「こんなにすばらしい披露宴は初めてです。素晴らしい友人、素晴らしい新居。おめでとうございます」と挨拶した。私のスピーチが一番つまらなかったと思う。

その後、それぞれ参加者が用意した贈り物が披露される。披露宴の参加者は事前に贈り物用のテーブルに持参した贈り物を置くことになっていたらしい。司会者は、そのテーブルに置かれた品を一つ一つ紹介していく。まさに、実用品の数々。魔法瓶、蚊帳、懐中電灯、ティーセット、毛布、ランプ、服など、生活に密着したものばかりだ。贈り物を用意できなかった人は、テーブルに置かれた封筒に現金を入れて、用意の箱に入れておく。私も持っていたお札を入れた。

その後、一枚皿に豪華に盛り上げられたケニア料理の数々が、振舞われた。チャパティというパン、ヤギ肉と野菜のスープのカランガ、ジャガイモと豆ととうもろこしを炊き合わせたムキモ、ほうれん草のような緑の野菜・スクマの炒め物などなど、それらが一つのお皿にたっぷりと盛り込まれていた。それらを皆が黙々と食べてお腹がいっぱいになったところで、どこからともなく聞こえてくるアフリカンミュージックにあわせて踊り出す。

ほんの数時間の間に自己紹介をし、食事をし、一緒に

踊る。それだけのことなのに、どうしてこんなに楽しい時間になるのだろうか。ここにいるすべての人と楽しい時間を一緒に過ごし、すっかり友人になれたような気にもなってくるというその不思議。お腹も心も満たされて幸せな時間だった。みんな笑顔だった。

ケニアでは結婚式をする人・しない人、今回のように、

ずーと後になってする人など、いろいろな人がいる。その後多種多様な結婚式・披露宴に参加したが、どうしてかこの屋根のない建築中の家での披露宴での幸せな時間が、いつも思い出される。

帰り際、私の友人が遅れて入ってきた。手ぶらで、しかも遅刻で、終わった頃に来るとは。しかし彼も、新郎新婦にお祝いを言い、笑顔で握手していた。

新郎新婦は、何は無くても

「感謝の気持ち」を伝えるための、招待客は何は無くても「お祝いの気持ち」を伝えるための結婚披露だった。

会場、贈り物、食事、どれも特別なものはないけれど、温かい心が集まったケニアらしい式だったと思う。ヒールのある靴で疲れきってたどり着いた道のりだったが、帰るときは、温かい気持ちで足取りも軽くなったような気がした。



一枚の皿に盛り上げられたケニア料理

‘わんりい’ おたより会員の皆様、そして入会をご希望される皆様へ

毎年4月から新年度になります。途中入会は、入会月によっては割引があります。詳細は事務局にお問合せを。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

▲入会はいつでも歓迎しています。

▲入会すると‘わんりい’の全ての活動に参加できます。

活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100（事務局）

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わんりい’は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

*紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

いったい珍珠海は何処にあるのよ〜!?

いつの間にか山道を登っていた。仙乃日シエンナイリーの麓から元の広場のような場所まで後戻りした私は、別の方向にのびている小道を歩いていた。先程までの道と呼べるかどうかとも怪しい灌木の隙間を縫う細い踏み跡に比べれば、こちらはしっかりと踏み固められた確かな道だった。

こんどこそ間違いないと確信を持って歩きだした筈だったが、道はどうやらどンドン山奥へと入って行くような様子なのだ。30分ほど歩いたところで「本当にこっちで良いのかなぁ・・・」と不審に思われてきた頃、突然森の奥から楽しげに叫び声をあげながら馬に跨り山道を駆け下りてくる一行がやって来て、先頭を走っていた馬の若者が私を見ると声をあげた。

「小姐、何処に行くつもりだい!？」

「珍珠海チエンジュウハイよ」

「珍珠海なら後ろだよ！この道は君が一日歩き続けたって何処にもたどり着けやしないさ」

彼はそう叫びながらアツという間に私とすれ違うと道を駆け下っていった。

その後を少し遅れて楽しそうに笑い声をあげながら、西洋人の男性と東洋人の女性が、やはり馬に跨り土地の人間らしい男と共に、道を駆け下りてきた。きっと先頭の馬の青年はガイドなのだろう。この亜丁自然保護区の中をグルッと大きく周遊できる道があるのだと聞いた事があった。きっと彼らは馬でその道を回ってきたのに違いない。

羨ましが込み上げてきた。この美しい土地で私がまだ見た事の無い場所にはどんな景色が広がっているのだろうか。ここに滞在している間にぜひ自分も行ってみたいが、亜丁を訪れる前に十分な中国元を準備してこなかった私には、馬やガイドを雇うだけのお金の余裕は無かったのだ。いったいどうすれば行く事ができるのだろうか…。珍珠海よりもそちらの事で頭をいっぱいにしなから、私は今まで登ってきた道を回れ右して彼らの去っていった後の道を下った。

再び元の広場まで戻って来たところで、珍珠海への入り口はスグにわかった。中国人の団体旅行と思われる一行がガイドに連れられ林の中に入っていくのが見えたのだ。彼らの後を追いかけて最初から知っていなければ絶対気がつかないような林の中の道を少し進むとスグに木々の隙間から珍珠海の湖面が見えてきた。

これまで亜丁の湖といえば、宝石のように美しいニウナイハイ「牛奶海」や「五色海ウースーハイ」を見てきていた私は「珍珠海」にはとって

ていた時も「亜丁の湖の中で一番美しいのはどれだと思う？」という私の問いに、宿の親父は親指を立てながら「珍珠海」だと答えていたのだ。だが林の中を抜け湖の湖畔におりた私はすっかりガッカリしてしまった。

周囲をグルッと森に囲まれた湖は、珍珠海というその名に似合わず水はドロんとにごった緑色で、湖畔にはマナーの悪い観光客が落としていったらしいゴミまで落ちている。これでは日本でも見られる普通の沼や湖と変わりない。だが湖畔でやかましく騒ぎながら熱心に記念写真を撮り合っている旅行者達から離れ、一人で湖の奥へ向かった時「ああ、そうなのか・・・」と合点があった気がした。

湖を奥の方から眺めた真正面には先程私がその麓にただずんでいた仙乃日が、雲に覆われた姿で湖の向こう側に聳えていた。珍珠海の美しさとは仙乃日とセットになっているものなのだ。そういえば昨夜話している時にも、宿の親父が仙乃日が湖に逆さに映りこんでいる観光写真を私に見せてくれていたっけ。

この湖から間近に聳えている仙乃日は、白銀に輝く亜丁三大神山の中でも最高峰だ。雲が晴れていればどれほど素晴らしい眺めになるのだろう。だがその姿が厚い雲の中に隠れてしまっていれば珍珠海はただの緑色の沼だ。これまで亜丁で見えてきた宝石のように美しい青く輝く湖の姿から、珍珠海にも湖そのものの美しさに期待を膨らませていた私は、少し白けた気持ちで湖を後にした。沖古寺に戻る帰り道の途中で、またパラパラと雨が落ちてきていた。

小屋に戻って暖かい汁麺を食べていると、私を見つけた先程の少女が待ち構えていたように寄ってきて私の横にちょこんと腰掛けた。その場にいたおじさんが「彼女はまた紙を折って欲しいんだよ」と笑いながら言った。折り紙のおかげですっかり仲良しになれたらしい。少女が期待のこもった目で私を見つめているので、急いで麺を食べ終え折り紙を取り出すと仕事を終えて小屋で一休みしていたらしい村のおじさんや少年達も集まってきた。

私が鶴や花などを次々に折って見せ皆が感心する度に、宿屋のお嬢はすっかり「私のお姉ちゃんよ」といった態度で得意そうに折り紙を取り上げ、全部自分の物にしているのが子供らしい欲張りさで可愛らしい。ふと見ると賑わっている輪の後ろで、この小屋の従業員の娘であるらしい少し年上の大人しそうな少女がひっそりとこちらを見つめていた。彼女を呼び寄せ「あなたもやりたいたい？」と尋ねるとコクンと頷いたので、彼女にも折り紙を渡して折り方を教えながら二人で鶴を折って見せると、周りにいた腕白そうな少年達やおじさん達までが自分も

やりたいと身をのりだして紙を取り上げ、食堂はすっかり折り紙の講習会場だ。

ちょっと教えただけですぐに折り方を覚えて上手に作ってみせる子もいれば、紙をきちんと二つ折りにする事さえ上手くできずに折り紙をぐちゃぐちゃにしてしまう子もいるが、みんな好奇心に目をキラキラさせて楽しそうだ。私はみんなが打ち解けてくれた事が嬉しくてたまらなかった。旅に出て一番楽しいのはこんな現地の人々との触れ合いだ。やっと亜丁がわたしに心を開いてくれた。そんな気がして胸の中が喜びに満たされていた。

外はザアザアと激しく雨が降っていた。先程の帰り道で濡れた身体が冷えて寒くなってきた。

「ねえ、火のそばに座りましょうよ」

席を立てて台所に入ると昨夜のうちにすっかり馴染んでしまった厨房の青年に声をかけ、台所の裏口の外側にあるカマドの後ろのベンチに座った。トタンの屋根からは激しく雨水が流れ落ちていたが、そこはまるで暖炉の前に座っているように暖かくて居心地が良い場所だ。少女達や村人と火の焚き口の前に並んで座り、折り紙を折ったり喋ったりしながら火が弱くなれば自由にベンチの後ろに山にして積んである薪を取ってカマドの中にくべた。

後ろを振り返れば雨に煙るように亜丁の湿原が広がっている。こんな風に村人達と過ごしていると、まるで自分もこの村の一員になったような気持ちだった。折り紙に飽きると歌を歌った。私の数少ない中国語の歌のレパートリーの中で、一番みんなに受けたのは「小薇」だ。^{シヤオウェイ}中国系人間なら世界中で誰もが知っている、明るいメロディーの可愛らしいラブソングはチベット族である彼らにも知られているらしい。

私が歌うと少女達も一緒にハモって合唱になった。

「・・・ある一人の可憐な少女、彼女の名前は小薇さ
彼女は優しい眼差しで、僕の心を盗んで行った・・・」

村のおじさん達がカマドの燃え差して火を付けたタバコをふかしながら「很好、很好」と褒めてくれた。

新宿の裏町で中国人の同僚と働いていた時に覚えたこの歌を、こんな場所でこんな風に歌う事になるなんて。

そういえばマレーシアを旅行中、ある街で毎日通っていた華僑の営む食堂の女の子達とも一緒にこの歌を歌った事があったのを思い出した。全く中国人達の世界はワールドワイドだ。中国語が話せれば世界中どこでも生きていけるという話を聞いた事があるけど、きっと本当にそうなのだろう。

他に歌える歌が無いので同じ歌を何度も繰り返し歌っていると、小屋の裏が賑やかなので様子を見に来たらしい強欲顔の宿の女将は、自分の娘が私の隣にちょこんと座り

すっかりなついている様子を見て苦笑いしていた。

いつの間にか厨房から出てきていた昨夜の青年が私に言った。

「小姐、君は変わってるよな。俺は今まで此処で働いて何人もの日本人が泊まっていくのを見たよ。だけど俺達の仲間に入ってきて、一緒に喋ったりしたのは君一人だけだ。他の日本人は俺達なんかに興味を持たないさ。何で君は俺達と喋るんだ？」

そんな事を聞かれても戸惑ってしまう。私はただ自分の訪れた土地の人達と触れ合うのが好きだけだ。極端な事をいえば旅は観光などしなくても、その土地の人と交流が持てたらそれだけでいいくらいだ。

「だって亜丁が好きなんだもの。あなた達も亜丁の一部でしょう？」

青年にはそう答えた。

私達がそんな風にカマドのそばで過ごしていると、雨でびしょ濡れになった数人の中国人旅行者達が火にあたりに来てきた。亜丁の入り口から此処に来るまでに、雨に降られて濡れてしまったのだ。

彼らのために場所を空けながら挨拶を交わして暫く話をした。広東省から6人で旅行にやってきたのだそうだ。昨日一緒に山を登った学生達も広東省からだったが、今日の彼らは既に社会人の香りがする少し大人のグループだ。

中国については詳しく知らないがアジアの十字路であり中国の経済特区でもある香港に隣接する広東省は、中国の中でも指折りの大都会の筈だ。広東省から訪れる旅行者が多いというのも、その都市の豊かさの表れなのだろうか。明日は洛絨牛場ルオロンニウチャンに遊びに行く予定だという彼らに、私は熱っぽい口調で山の上に輝く湖の話をした。

暫く火にあたって温まっていた彼らが部屋に戻ってしまった後も、私はまだその場に留まって村人達と過ごしていた。宵闇に包まれた小屋の外でパチパチとはぜる赤い炎を見つめているのは心地良いものだ。明日の予定は何も決まっていない。夜の闇が濃くなり一人、また一人と村人達が去って行くまで私はそこに座っていた。

部屋に戻ったのは9時過ぎだった。意外な事に同室の泊まり客は先程火のそばで話をした広東省のグループだったが、それより驚いたのは部屋の中に貧しい身なりをした6人もの村の男達がいて彼らと何事か相談している真最中だったのだ。

「いったい何事なの？」驚いている私に彼らの言う事には、村の男達はどうかやらホーストレッキングの勧誘とガイド料の相談に来ていたらしいのだ。私の目が輝いた。

「どこに行くの!？」

「垂丁の中全部よ。馬でグルッと垂丁全部の景色を見て回るの」

グループの女性が答えた。即座に私の脳裏には昼間珍珠海のそばで出会い、馬で走り去って行った旅行者の姿が浮かんでいた。

「ええ～!! 私も行きたい～!!」

思わず叫び声をあげてしまった私に、その女性は「じゃあ、一緒に行きましょうよ」と気さくに声をかけてくれたが、そのとたん自分の財政状況を思い出した私は口ごもってしまった。

「でも・・・私はお金が足りないの。ここに来る前に両替しておくのを忘れちゃって・・・」

すると奥の方にいたグループのメンバーから声が上がった。

「いくら必要なんだい? 僕は結構多目に現金を持ってきた。もし良ければ君の日本円と両替してあげてもいいよ」

「ええ～っ・・・!!!」

これで話は決まってしまった。先程出会ったばかりの彼

らと、突然臨時の騎馬隊を組んで垂丁を巡る旅に出かける事になったのだ。その日の夜、私は興奮のためか中々寝付く事ができずにいた。
(次号に続く)

【トピックス】 山下孝之さん、おめでとう!

2009麻生サークル祭で、万馬馬頭琴アンサンブルの皆さんと一緒に、アンデスの民族楽器・ケーナを演奏くださった山下孝之さん(1982年/東京生まれ/町田市在住)は、キーボード、シンセサイザーの演奏の他、作曲・編曲も手がけています。この度、江ノ電電鉄が公募の「あなたが作る江ノ電の歌」のメロディーの作曲部門で、日本全国から応募の1197曲の中から最優秀賞に選ばれました!

「江ノ電の歌」お披露目コンサート

2010年1月31日(日) 14:00～16:15

於: 藤沢リラホール(藤沢駅南口より徒歩3分)

参加: 無料(抽選でペア90組180名様をご招待)

*応募方法などは、下記ホームページか電話でお問合せください。

http://www.enoden.co.jp/whats_new/0910_song4.html

●江ノ島電鉄株式会社 ☎0466-24-2716

《'わんりい' 掲示板》

海老名『第九』ソリストたちによる

ガラ・コンサート

～世界名曲とオペラアリアでゆく年を送る～

海老名文化会館 小ホール ▶ <http://www.ebican.jp/>

相鉄線・小田急線・海老名駅西口徒歩5分 海老名市上郷 476-2

2009年12月27日(日) 14:00開演(13:30開場)

●出演: 宮本彩音(ソプラノ)、田辺いづみ(メゾソプラノ)、三村卓也(テノール)、崔宗宝(バリトン)、佐藤文雄(ピアノ)

●参加費: 2,500円(全席指定) 当日3,000円

●予定曲目: からたちの花/落葉松/草原の夜/アメイジング・グレース/ああ そは彼の人か(椿姫より)/ノバネラ(カルメンより)/おお カルロ私は死ぬ(ドン・カルロより)/乾杯の歌(椿姫より)他

●主催: 崔宗宝音楽事務所 後援: 海老名市

●チケット: ☎046-232-6065(崔宗宝音楽事務所)

中国茶を飲みながら中国ライブを楽しむ

茶館銀芽からの知らせ

<http://lasa-kikaku.cside.com/chakan-ginga.php>

東京都大田区山王1-14-7 ☎03-3777-4568

◆11月の開館日

11/13(金)・11/14(土) 12:30～20:00

11/15(日) 12:30～18:00 ■茶席: ¥700～

鉄観音・宋種単叢(青茶)、信陽毛尖(緑茶)、川紅(紅茶) 他販売もあり(10グラム単位)

◆中国茶講座(各回3～8名)

■入門講座: 11月13日(金) 18:30～20:00

参加費: 2500円(『中国茶の基礎知識』+お茶2種代)

■特別講座: 11月13日(金)14日(土) 13:30～15:00

参加費: 3000円(茶6種と各茶の解説)

◆ゲストライブ(定員30名)

11月15日(日) 13:30～ ¥2000(お茶代含む)

■特別ゲスト: 笛子の王明君さん

久しぶりの登場。いつも大好評の王明君さん、すばらしい演奏が楽しみです。

◆展示

「加彩の磁器」

立春斎所蔵の茶具を中心に。花や鳥などを美しく絵付けしています。

参加申込みと問合せ: ラサ企画 ☎03-5748-3040

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

【ご予約ください!】2010'わんりい'新年会の日取りと場所、下記に決定! 詳細は12月号で。

—————2010年1月31日: 麻生市民館・料理室

11月の定例会 ■11月16日(火) 13:30～ ■12月号のおたより発送日 11月28日(土) 14:30～ 共に 於: 田井宅